

## “穿衣載帽工程”から見る中国の観光開発の一側面

左永平・阿部朋恒・思沁夫・上須道徳

### はじめに

2017年9月、本稿の執筆者である左永平、思沁夫、上須道徳、阿部朋恒の四名は、世界農業遺産委員の阿部健一氏に同行し、普洱市西部に位置する西盟県および隣接する孟連県、瀾滄県を調査旅行する機会を得た。このうち左永平は西盟県で幼少期を過ごし、現在も普洱市で唯一の四年制大学である普洱大学で教鞭をとる研究者である。阿部健一氏を含めほかの同行者は、これまでもそれぞれ雲南省各地の生態環境や民族文化の調査研究を行ってきたものの、西盟県とその周辺を訪れるのは初めてであった。

この調査を通じてわれわれに強い印象を残したことのひとつに、中国において地理的にも経済的にも最も周縁に位置づけられるはずのこの地域ですら、都市と村落の景観が見事に整えられている状況があった。改革開放路線のもと三十年以上にわたって順調な経済成長を続けてきた中国の発展ぶりを再確認するとともに、政策的なインフラ支援が国土の末端まで行き届いているということを実感させられる経験であった。なかでもわれわれがとくに興味を覚えたのは、その景観が単に「近代的」なだけでなく、地域ごとの特徴を色濃く表現するものであったという点であった。たとえば、西盟県の首府であるモンソン鎮では、市庁舎や小中学校などの公的機関のみならず商業施設や住宅街も含め、市街の主だった建物の外装がクリーム色で統一され、屋上と表通りに面した窓には茅葺屋根を模した装飾が施され、さらに牛の頭をデザイン化した絵がそこかしこに描かれている。同じく西盟県のラフ族村落では、緩やかな尾根を拓いて伸びる目抜き通りに沿って統一規格の平屋建てセメント家屋が整然と並び、その壁にはやはり一様にヒョウタンの絵があしらわれている。

また、同県でもワ族が住むある村落では、二階建てのセメント家屋が並ぶ居住区の開発が進む一方で、高床式の木造家屋が集中する一角は政策によって保

全され、「伝統的」な景観を残していた。

本稿では、上記のうちとくに西盟県の中心市街で進められている景観整備プロジェクトを中心事例として紹介したうえで、そうした新たな都市景観がどのような論理のもとで築かれているのかを検討したい。以下、第一章ではまず、本論に関連する範囲で地域概況をまとめたうえで、現在進められている西盟県の都市景観建設について、その政策的背景を含めて概要を紹介する。続く第二章では、ワ族をめぐる民族表象と儀礼実践への政策的介入の歴史的経緯を関連づけながら考察し、西盟県の景観構築を動態的変化のなかに位置づけて検討する。さらに第三章では、そうした近年の変化が地域住民の生活とどのように関連しているかについて、村落部も含めた西盟県での聞き取り調査にもとづいて若干の検討を行いたい。

## 1. 西盟県における“穿衣載帽工程”

西盟ワ族自治州（以下西盟県と略記）は、雲南省普洱市の西南部にあり、東は瀾滄ランツァンラフ族自治州、南は孟連タイ族ラフ族ワ族自治州、西・西北ではミャンマーと隣接している。雲南省とミャンマーの境界に沿って南北に連なる怒山山脈の南端部に位置するため、県を中心に置かれるモンソン鎮周辺に広がる 3000 ムーほどの盆地を除き、管轄領域のほとんどを山地が占める。亜熱帯に属し気候は温暖湿潤だが、山がちな地勢から歴史的にみて大規模な農耕や都市部との通商は発達せず、山間部では 20 世紀中葉に至るまで焼畑農業を中心とする自給経済が営まれていたとされる。人口およそ 9 万人のうち 9 割以上がワ族、ラフ族、タイ族などの少数民族であり、なかでもワ族はおよそ約 6 万人を数え、総人口の約 7 割を占めている。

ワ族はこの地域に最も早い時期に住み着いたエスニック・グループの末裔だと考えられており、今日でも地域住民の多数派を占め、県レベルの民族自治を担う民族として認められている。中国の民族区域自治制度において、区域自治の主体に指定された民族は、その領域内での民族言語教育や条例制定など一定の政治的権利を与えられるほか、開発投資や家計支援など経済的な資源配分の面でもさまざまな恩恵を受けやすい立場を得る。こうした論理のもと、ワ族を主体とする自治区域である西盟県では、政府主導によるさまざまな施策においてワ族への配慮が優先されている。たとえば、西盟県の委託によって雲南省の地方都市開発計画部門が策定した『西盟県城総体規劃修編（2013-2030）』には、県城の将来的な発展の柱となるべき産業として民族文化観光が挙げられているが、そこでもワ族文化を前面に打ち出した方針が掲げられている。

本稿で扱う景観整備にも、同様の論理は反映されている。冒頭で紹介したように西盟県の県城ではエキゾチックな意匠が際立つ景観が出現しているが、そこで際立つ諸要素はいずれもワ族の文化的特徴を視覚的に表現するものとされているのである。この動きは“穿衣載帽工程”と呼ばれるプロジェクトの一環として実施されており、西盟県では 2011 年より県政府の主導によって進められている。県政府の担当者からのヒアリングによると、県城（市街地）のほぼ全体に相当する指定区域内の建物に「薫ぶき風オブジェ」「クリーム色の壁」「牛の頭のモチーフ」などの装飾を施し、ワ族の伝統を感じさせる街並みをつくるのがその主な骨子となっているという。“穿衣載帽工程”ではこのほか、市街緑化や街灯の設置、そして「ワ族文化広場」をはじめとした公共空間の創出などが同時に進められ、すでに 1.63 億元以上の投資が行われている。企画段階より多くの専門家やコンサルタント業者が参加していたとされ、担当者によるとニュージーランドでマオリの文化を活用した観光開発を手掛けた経験

を持つアドバイザーを国外から招聘したこともあったという。そうした努力の成果は早い段階で現れており、2010年に西盟県を訪れた観光客数は5~7,000人であったが、“穿衣載帽工程”がスタートした2011年以降順調な伸びを見せ、2016年には20万人とおよそ40倍に増加している。

このプロジェクトの名称となっている“穿衣載帽”とは、直訳すれば「衣服を着せて帽子をかぶせる」といった意味になるが、政策上の概念としては、街並みに装飾を施すことで文化的な風格をまとわせることを指す。新中国成立当初からしばしば都市計画の手法として用いられてきた概念だとされるが、「見た目だけ整えて中身を疎かにする」といった消極的な意味合いで用いられることも多く、とくに沿海部大都市などにおいては地方政府の業績づくりや商業イベント誘致のためにハコモノの建設を優先させ、電気や上下水道、生活交通網などソフト面の改善を後回しにするような都市開発を揶揄する言葉にもなっている〔夏泉 2013〕。一方、相対的に経済発展が遅れた「辺縁」とみなされてきた地方においては、都市開発における“特色化”、すなわち地域の個性を生かした街づくりを推進することで地域の活性化と観光産業の育成を図ろうとする傾向が近年顕著になりつつある。そうした文脈においては、魅力的な「見た目」をつくること自体が地域の経済発展につながるものとして捉えられ、“穿衣載帽”の名を冠したプロジェクトがますます積極的に行われるようになっていく。

先にも述べた通り、西盟県政府の発展計画においても、ワ族の文化を前面に打ち出した民族文化観光は将来もっとも有望な産業の一つとして数えられている。このように地域や民族の文化を観光化や地域活性化のために生かしていることとする試みは、近年の中国民族学においても文化の商業化(“文化資本化”)をめぐる実践的な領域として注目が集まるようになってきている〔馬翀煒・陳慶徳 2004〕。そこでの議論は、地域や民族の文化を今日的な文脈から切り離れたかたちで保存しようとするのではなく、むしろ政治的、経済的な機会に結び付く資源として積極的に利用することにこそ、現代において可能な文化の継承のあり方を模索し、主流社会と「辺縁」の経済的格差を解消する契機を見出そうとするものである。こうした意味での“文化資源化”を実際の目標に組み込んだ開発計画は21世紀の中国では津々浦々にみられるものだが、西盟県のように観光のほか有望な産業的基盤を欠く「辺縁」地域の地方都市ではとくに重要視されていると考えられる。なかでも、少数民族の文化を都市景観に反映させて“特色化”を図ろうとする政策はごく近年になって本格化したものであるため、西盟県の“穿衣載帽工程”は、中国における“文化資本化”の最先端を探るための格好の事例だといえる。奇しくも、西盟県はそうしたプロジェクトを全国的に見ても早い時期にスタートさせ、かつ目下のところ数少ない成功例とされているため、現在でも全国各地からやってくる視察団が絶えないという。

また、2018年には西盟県県城から40kmの距離に建設中の新しい空港、2020年には高速道路が完成する予定であり、さらには雲南省省都の昆明市とミャンマーを結ぶ鉄道の敷設予定地となっているため、観光業の今後は明るいと思われている。

本章では、西盟県における“穿衣載帽工程”の概要を紹介するとともに、そこにワ族の民族表象が組み込まれていることに着目し、その背景にある政治経済的な論理を明らかにした。次章では、ワ族をめぐる民族表象の歴史の変遷を確認したうえで、“穿衣載帽工程”においてそれが具体的にどのように反映されているかを明らかにしていきたい。

## 2. 民族表象の裏で

西盟県を訪れる人びとが必ず訪れる場所のひとつに、市街地からほど近くに位置する「竜の湖（“龍潭”）」がある。鬱蒼とした森に覆われた湖のほとりには周遊路が整備され、観光客は小一時間ほどの散策をすることができる。しかし、そこで人びとの目を引くのは豊かな自然ではなく、むしろ樹木の幹や岩肌などに配された無数の牛の頭蓋骨が演出するおどろおどろしい景観である。観光客向けの案内板に書かれた解説によれば、“牛頭”はワ族が神に祈りをささげる儀礼で重要な役割を担うものであり、数多くの“牛頭”はこの湖が「神聖な場所」であることを示しているのだという。しかしながら種明かしをすれば、観光客の目を奪うこれらの“牛頭”は周遊路の敷設にともなって設置されたものであり、竜の湖そのものもそれまで生活の場として重要ではあっても、ワ族のコスモロジーにおいてとりわけ重要な意味を担う場所ではなかった。すなわち、竜の湖は観光開発の一環として、近年になって「聖なる場所」として演出されるようになったのである。したがって、そこには市街地における“穿衣載帽工程”と同様、ワ族の伝統を視覚的に表現する景観を整備することで新たな観光資源をつくり出すという論理が働いているといえる。

とりわけ中国周縁地域における近年の観光開発では、このように少数民族の「伝統」を記号として利用する局面が頻繁にみられる。以下では“牛頭”を例として、それがワ族の伝統を代表する記号として流通するに至った経緯を、ワ族をめぐる民族表象の歴史の変遷と結びつけながら読み解いていきたい。

## 2-1. 西盟県周辺のワ族をめぐる民族表象

ワ族は中国の民族政策において認められている 55 の少数民族のひとつであり、2000 年の統計によれば国内人口はおよそ 40 万人である。1954 年に民族として識別された際の名称は「カワ族（カ瓦族）」であったが、「カー（カ）」がタイ語において「臣下」を意味する蔑称であるとみなす意識の高まりを受け、1962 年には現在の民族名称であるワ族に改称された [山田 2009:4]。ワ族はメコン川以西の山岳地域に分布しており、この地域は漢語文献においては「ワ族の暮らす山々」という意味で「阿佤山」と呼称されてきた。ワ族の居住地域はさらに、言語的特徴や地政学的状況の内部的差異から、①西盟県周辺、②ランツァン県周辺、鎮康永徳周辺の三つに区分されることが多い [佤族簡史]。なかでも西盟県を中心とする一帯は、域内人口の 9 割近くをワ族が占めており、ワ族文化の中核的地域とされる。一方、この地域は歴史的に生産技術や社会制度の発展がもっとも遅れた地域とされ、たとえば生業について、「阿佤山」の他の地域では 19 世紀以降焼畑耕作から水田農耕への移行が進展したが、西盟地域では 20 世紀中葉まで焼畑耕作が大部分を占めていたとされる [羅 1995: 116-125]。

史的唯物論的な視座から社会を類型化する傾向が強い中国民族学において、ワ族とりわけその文化的の中核地域とされる西盟県周辺は、極めて低い発展段階にあることを示す「原始[PRIMITIVE]」の名のもとに描かれてきた。いわく、西盟県周辺のワ族社会には土地や生産手段が公有される「原始農村公社」の名残りがみられ [羅 1995: 142-151]、宗教についてもアニミズム的な「原始宗教」が信仰されているとされる [羅 1995: 315]。中国民族学においてワ族をめぐるこのような学術的表象がなされてきたことは、“穿衣載帽工程”にみられる民族文化の資源化・商業化を検討するにあたって、とりわけ“牛頭”が伝統を体現する指標として活用されていることを理解するにあたって押さえておくべき重要な背景となっている。21 世紀に入って民族文化の商業化が推し進められるようになると、ワ族の原始性そのものが観光資源としての価値を帯び、それを強調するのに適したシンボルとして牛頭が活用されているという側面があるためである。

次節で詳述するように、かつてワ族の一部には首狩りを行って得た人頭を供犠する風習があったが、中華人民共和国成立後に厳しく禁じられ消失していった。近年になってからも、民族平等の観点から、また倫理的な観点からして問題をはらむためにワ族の首狩りが観光化の文脈で直接的に打ち出されることはない。その代わりに、政治的な正しさによって隠される人身供犠の換喩として、「原始」を体現するギミックとして強調されるのが牛頭なのである。

## 2-2. 牛頭

これまでの民族学的研究によれば、ワ族の「原始宗教」はさまざまな自然物や自然現象に靈魂[SOU]ないし鬼神[SPIRIT]を認めるアニミズムの一種であるとされ、伝統的には大量の犠牲と費用をかけて儀礼を行うことで知られる。なかでももっとも盛大な儀礼とされるのが、人頭および牛頭を供物として用いるものである[左 2008:19]。人頭は豊作を祈願する儀礼で用いられ、そのために毎年よその村落の住人を対象とした首狩りが行われてきた。中華人民共和国による解放直後の調査ではワ族の3分の1程度が首狩りの慣行を有していたとされるが、その後厳しく禁じられたことによって1958年の報告例を最後に消滅したとされる[羅 1995:272]。牛頭は人頭に次いで重要な祭祀品であるとされ、ワ族が共通して伝えるスガンリと呼ばれる起源神話にも、牛頭を供えたことで大洪水の難から逃れる場面が描かれている[左 2008:19]。また実際に20世紀中頃には、戸数214世帯の村で約半年のうちに64頭の牛が供犠されたという報告がなされており、犠牲とされた牛の頭は人家の門前に掲げられたという[羅 1995:356-357]。

しかしながら、儀礼に心血を注ぐこのようなワ族の姿は、現在の西盟県近郊においてみられるものではない。周知の通り中国では、大躍進および文化大革命と呼ばれる政治運動が全土を席卷した1950年代後半から1970年代後半にかけて約20年の間、「科学的」でないとされるさまざまな習俗や生業様式、宗教や儀礼などが否定され、禁じられた。この時期には、首狩りだけでなくあらゆる儀礼実践が「迷信」としてみなされ、とりわけ犠牲を「浪費」することが戒められたため、牛など大型動物を供犠する儀礼は撲滅の対象となっていた[羅 1995:356-357]。改革開放後の1980年代以降は再び儀礼を行うことが許されるようになるが、牛を用いるような大規模なものについては特に、その復興は緩慢かつ限定的だったと考えられる。たとえば、ワ族の年中儀礼について論じた段は、「今日では、若者は民族の伝統的な祭日の一つか二つしか挙げられず、他民族の祭日を誤って挙げてしまう者もいる」[段 2006:19]といった状況を指摘している。また、今回われわれが西盟県周辺のいくつかのワ族村落で実施した聞き取り調査でも、牛などの大型動物を用いて行われる儀礼として挙げられたのは春節や五・一労働節(メーデー)など国が定めた祝日に地方政府の主導のもとで行われる祝祭だけであり、ワ族の住民が自発的に行っている儀礼としては、病治しを目的として鶏や鴨などの家禽類を供犠して行われる小規模なものが確認できたのみであった。

すでに述べた通り、西盟県の中心部において進展しつつある“穿衣載帽工程”ではワ族の「伝統」を表現する景観づくりが進められており、市街のあらゆる

建物の外壁に牛頭をモチーフにしたデザインが描かれ、観光スポットである竜湖の周遊路には数多くの牛の頭蓋骨が設置されるなど、いたるところで牛頭のモチーフが活用されている。しかし一方で、西盟県の域内でも村落部においては、牛を供犠する儀礼は一般に行われるものでなくなって久しく、人家の門前に牛頭が立ち並ぶといった景観も失われている。都市部と村落部に見られるこうした逆転現象は、“穿衣載帽工程”における景観整備が、今日のワ族村落にみられる生活ではなく、かつて民族学的研究に書き留められた「伝統」を参照項として進められていることを如実に示している。西盟県城の市街地や竜湖に出現しつつある「伝統的」な景観は、われわれ外部からの訪問者のみならず、村落部に暮らすワ族にとっても同様に、新奇なものとして目に映っているはずなのである。

### 2-3. 儀礼

西盟県の“穿衣載帽工程”によって創り出された景観は、同地域のローカルな生活に根差したものではなく、中国民族学における学術表象を起点として行政機関や各種メディアが拡散した、ワ族の「原始」イメージにこそ由来したものであった。かつてボードリヤールは、メディアによって流通する記号の連鎖の結果として構築される現実のことをハイパーリアリティと呼び、そのなかで人びとが生きることを現代社会の特徴として論じた[ボードリヤール 1979]。西盟県における“穿衣載帽工程”は、まさにそうした意味でのハイパーリアリティを大規模に出現させる大きな契機となっていたと考えられるのである。

そこで留意すべきは、“穿衣載帽工程”によって生み出されたハイパーリアリティが、外から訪れる観光客やわれわれのような研究者だけでなく、西盟県に住むワ族の人びとも同時に巻き込んでいるという点である。前節で述べたように、西盟県内のワ族村落では世帯単位、村落単位を問わず大規模な儀礼の実践は衰退傾向にあるとされている。しかしその一方で、西盟県城では2000年代半ば以降、政府主導のもとで“新米節”や“木鼓節”などワ族の年中行事を題材としたイベントが催されるようになり、近年では数千人規模の人びとが集まるに至っている。歌や踊りなどのパフォーマンスを中心としたそうしたイベント（写真5）には、観光客や県城の住人たちだけでなく、近隣の村落に住むワ族の人びとも大挙して集まってくるのだという。われわれが県城近郊のワ族村落で行った調査でも、「ワ族の年中行事に参加したい人は県城に出向けばよいのだから、村では何もしない」といった意見が散見された。このことから、大規模な儀礼が行われなくなった村で暮らす人びとでも、県城でのイベントに参加するという個人的な選択によって民族の「伝統」との結びつきを保つことができるという、きわめて現代的な状況が示唆されるのである。



県域で催されるイベントは、その内容においても意味においても、言うまでもなくかつてワ族の村落で行われていた年中儀礼とは大きくかけ離れたものであろう。しかしながら、牛頭や木鼓といったワ族の「伝統」を指示する記号が効果的に組み込まれていれば、そうしたイベントであっても、政治的言説やメディアにおいては十分にワ族の年中行事として機能しうる。西盟県においてそうした言説の積み重ねの中で生み出されたハイパーリアリティは、すでに同地域に暮らすワ族自身をも巻き込むほどに強固なものになっているのである。

おわりに

本稿では、中国の周縁部に居住する少数民族をとりまく文化表象と文化構築の今日的状況について、雲南省普洱市西盟県における景観整備プロジェクト“穿衣載帽工程”を事例として具体的に検討してきた。中国においては、文化大革命から改革開放へ、そして近年の文化遺産ブームの時代へと、民族表象の語り方を基礎づける力学的条件が数十年ごとに変化してきた。そうした歴史的経緯を踏まえるならば、西盟県の“穿衣載帽工程”では、「原始社会」としての学術表象を逆手にとってエキゾチズムを利用しつつ、観光客の関心を惹きつける景観を創り出すことに成功しているといえることができる。

また、西盟県で近年進められている民族観光(エスニック・ツーリズム)は、単に外部から向けられるまなざしに応えるのみならず、同地域に住む人びとの文化的実践の一端としての機能を担いつつあることも明らかになった。村落部において一度は人々の生活から切り離されたはずの儀礼の一部は、都市部のイベントとして装いを新たに、同地域の「伝統」として再び定着しつつある。こうした局面に鑑みるならば、西盟県の“穿衣載帽工程”によって進められつつある市街地や観光地の景観整備とは、将来的に同地域における文化構築の方向を導く土台づくりであるといえるかもしれない。

**〈謝辞〉**

- ・ 小林製菓「生物多様性保護・持続可能な利用に関する共同研究開発」
- ・ 中国普洱学院
- ・ 総合地球環境学研究所
- ・ 調査に応じてくれた人たち

**〈参照文献〉****(中国語文献)**

段世林 2006

「佤族節日文化保護与開發的思考」『雲南師範大学学报（哲学社会科学版）』  
VOL.38(2), PP. 15-20.

羅之基 1995

『佤族社会歴史与文化』中央民族大学出版社。

馬翀煒・陳慶徳 2004

『民族文化資本化』人民出版社。

夏泉 2013

「城市的“面子”与“里子”——以広州“水浸街”与“穿衣載帽”工程為例」  
『都市文化研究』VOL.8, PP.170-176.

左永平 2008

「佤族獵頭与剽牛—原始宗教祭祀仪式的典型方式」『文山師範高等専科学校学  
報』VOL.21(2), PP.17-21.

**(日本語文献)**

ボードリヤール、ジャン（今村仁司 訳） 1979

『消費社会の神話と構造』紀伊国屋書店。

山田敦士 2009

『スガリの記憶——中国雲南省・ワ族の口頭伝承（東京外国語大学アジア・  
アフリカ言語文化研究所叢書 知られざるアジアの言語文化Ⅲ）』雄山閣。